長崎新聞掲載／全3段（W378×H99）

続・奇跡はある

（04）

徳永　耕一

題字・林田八郎

新規案件と続編について

記念式典や京都出張も終わって、ゆっくりしようとしていた矢先、二〇二一年の十一月から十二月末にかけて、我ながらダイナミックと思える案件の動きが相次いだ。

とりわけ、呉市のビル購入の件が持ち込まれた時には驚いた。呉市は、名前こそ知っていたが、行ったこともなければ、考えたこともない町だった。

「当社とはあまり関係がない」そんな第一印象を持った。

購入金額が七・四億円と聞かされた時には、さらにその思いを強くした。

しかし、三井住友銀行から融資が得られる見通しが立ちそうなことや、テナントが広島銀行や日本生命や日本製鉄など超優良企業ということや、収益性も魅力的なことなどが分かってくるにつれ、私の気持ちは前のめりになり、ついに二〇二一年末、購入を決心した。

賃料収入としては月８００万円あり、当社としては最大のテナントビルだが、何分呉は遠い。先日行ったときなどは、昼食を取るタイミングがなく、ローカル線の駅で乗り継ぎの列車を待つ間に、ホームのベンチで弁当をかき込む有り様だったが、恥ずかしくもあり、食べた気がしなかった。

呉ビル外観

Jisco Group

ジスコ不動産株式会社
ジスコホテル株式会社
ジスコ子ども支援株式会社

長崎県諫早市永昌町4-26
TEL 0957-27-1112　FAX 0957-26-1777

―続編について―

新聞連載が始まってからは、よく顔見知りの人から声をかけられた。

「新聞見てますよ。けっこう面白いですね」「読みやすいですが、ご自分で書いたのですか?」

お褒めの言葉は嬉しくはあったが、多分にお世辞も混ざっているに違いなく、半信半疑で聞いていた。

年が明けて二〇二二年二月、長崎市内で開催されたある団体主催の講演会の席でのことだった。たまたま左に座った初対面の方から「新聞連載、見てましたよ」と声をかけられた。続いて右隣りの方からも「連載、面白かったですね」と告げられた。

これらの方々は、私の住む諫早市ではなく長崎市にお住まいで、仕事やお付き合いとは何の関係もなかった。

この時である。私に、「可能なら続編にトライしてみたい」との思いが芽生えたのは。

自分が書いた物を他人に見せるなどは、長い人生で考えたこともなかったし、その機会もなかった。真剣にペンを走らせたのは、銀行融資のときのお願い文くらいのものである。

しかし、たまたま書いた連載文が、全く見ず知らずの人に見ていただけただけでなく、「面白い」との印象や評価までいただけたことは、自分でも驚きで、書くことに自信とやる気が生じたのだ。

その後その思いは多忙さの中で埋もれていったが、自分史連載をお勧めしていた方の突然のご入院を機に再び頭をもたげ、「ピンチヒッター」として連載するのはどうだろうか」との思いになった。

長崎新聞社さんに、押し売りのような形で相談した結果、受け入れていただき、続編を連載できるようになったことは、「奇跡はある」とまでは言わないが、夢のようではある。

〈次回10月7日掲載予定〉